



浜松市天竜の山里、阿多古地域に伝承された「阿多古和紙」の唯一の継承者大城忠次さん（89歳）。その明るくて大らかで楽しいお人柄によって、若い人たちも和紙づくりを学ぶ動きが起きている。

先日、お訪ねした時、見事な人形とお面（「おくない」という祭りに使う）を作っておられることを知った。すべて和紙が原料である。

ひとつひとつの人形など、山里の暮らしをあらわしているところが興味深い。伐った材木を馬に引かせるところにしても、どのようにしてどうやって紐を結んでいたのか、あるいは和紙づくりの工程など、ひとつひとつ丁寧に作っている。

ところで、大城さんが赤ん坊のとき、親が材木を馬で引いていく時、その材木に紐を結わえた籠の中に揺られていったそう。そして、あるとき、紐が切れて落ちてしまう。親はそれを知らずにずいぶん歩いて気がついた。「ありゃりゃ、赤ん坊はどうしたんだろう」。あわてて引き返した。そんな話をお聞きした。

「大城さん、こんなに人形づくりが上手なら、人形作家としてやっていけましたね」・そう言うと、「いまごろそんなこと言われても困るよ。もう89歳だよ。いつ死ぬかわからん。50年前に言ってくれなくちゃ」。そう言って大笑いされた。

定期的に和紙づくりの講習なども開かれている。

和紙づくりについての問い合わせ：池谷（080-5412-6370）

浜松北部生きがい特派員 池谷 啓

